
神様の遊戯 - 紅の勇者 白の魔術師 -

羽月 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の遊戯 - 紅の勇者 白の魔術師 -

【Nコード】

N9146W

【作者名】

羽月 紫苑

【あらすじ】

明るく運動神経が抜群の少年、柏葉リクは“紅の勇者”として、生徒会長で頭もルックスも抜群の少年、冬原雪は“白の魔術師”として、異世界へ召喚される。勇者か魔術師、勝者しか元の世界へ還れないというゲーム。

ゲームに勝つヒントは、“金の瞳の少女”のみ。

二人のうち、勝利を手にし元の世界へと帰る者は誰か。そして、“百年前の事件”が、今回のゲームに及ぼす影響とは。

二人の少年は金の瞳の少女と共に、それぞれの旅路を歩み始める。

1・金の瞳の少女

「……おかしい」

柏葉^{かしは}リクは、幾度目かの言葉を発した。今日、何度こう言っただろう。

いや、今日ではない。この数分間に、というべきだろうか。

「おかしい。おかしい。おかしい。なんで？ どこ？」

リクはきよきよと辺りを見回す。森の中だ。所々に雪が積もっている。それは分かる。

でも、森になんかいるはずは無い。でも、それより……一番おかしいのは、リクの格好だった。

白いシャツに、茶色いズボン。そして編上げのブーツ。しかも、深紅のゆつたりとしたフード付きのマント。一番おかしいのは、腰についている長剣だ。

「どっかの、RPGの主人公じゃねえかよ……」

はつきり言つて、恥ずかしい。が、着替える服は無い。かといって全裸になるわけにもいかず、仕方なくこれを着ているのだ。

「なんでだろ……俺、確か……学校で、授業中で……」

学校で、宛名の間違った封筒を生徒会長に届けた。そして、その後は普通に授業を受けていた。

ぼつと、放課後の剣道部の練習のことを考えながら。

なのに、なんでだろう。疑問でいっぱいだったが、とりあえず歩いてみようとしてリクは立ち上がった。

「すいませーん、誰かいませんかー？」

人見知りではないリクは、誰かに呼びかけながらさくさくと歩いてゆく。

でも、鬱蒼と茂った森の中には誰もいない。

「なんだよこれ……夢？ リアルティありすぎ」

ぶつぶつ呟きながらも歩き続ける。

歩き続けていたら、いつの間にか森の外に出てしまった。ただ……森の外には、さつきよりも遥かに信じられない景色が待っていた。

「……なんだ、ここ……」

遠くに、賑やかな街が見える。でも、リクのいた日本の街ではない。

社会の教科書で見ると、ヨーロッパの街だった。いや、ヨーロッパ風といった方が正しいだろうか。

リクが街を呆然と見ていると、一人の少女が駆け寄って来た。

「あ、あのッー！」

突然の声に、リクは少女へ視線を移す。少女、と言っても、リクと同じ年の17歳くらいだろうか。

赤い長袖のワンピースに白いエプロンの、西洋風の洋服だ。

茶髪のセミロングで、大きな瞳が印象的。でも、一番印象的なのは……瞳の色だった。きらきらと輝く、金色の瞳。

金の瞳の少女は、リクの方へ駆けてくる。

「あの、もしかして、紅^{あか}の勇者様ですかっ？」

「……え？」

リクは、きょんととして聞き返す。少女は真っ赤になって、おろおろと言う。

「と、突然すいません。私、リディです。リディ＝ローレンス。あの街に住んでいます」

少女……リディは、さっきリクが見つめていた街を指差す。

「だ、だから、決して怪しい者じゃありません」

「え、あ……うん。俺、リク。柏葉リク」

いまいち把握できない状況に戸惑いつつも、とりあえずリクも名乗る。相手が名乗ったのだから、自分も名乗るのが礼儀だろう。

「リクさんですね。そして、あの、リクさんは勇者様ですか？」

リディはリクの格好を上から下までじろじろと眺めながら訊ねる。

「その……“勇者様”って？　もしかしてここ、地球じゃなかったりする？」

まさか、と思いながら訊ねたリク。が、リディの答えは、

「ち、きゆう？　なんですか？　ここは“クラリス”ですよ？」

というものだった。リクはたつぷり数十秒は固まってから、

「……は？ クラリス？ 何それ、俺、悪い夢でも見てんのかな……」

とぶつぶつ呟く。状況を把握出来ていないリクに構わず、リディは

「でも、何度考えてもその格好、勇者様にしか見えません」

と呟いて、リクの腕を掴んだ。急に腕を掴まれたリクはぎよつとリディを見つめる。

「な、なんだ？ 俺、急に……例えば、よくあるゲームみたいに魔王倒せとか言われてもお断りだぞ？」

「え？」

リクの台詞にリディはきょとんとして、そしてくすくす笑い出した。

ひとしきり笑ってから、リディはリクを見つめ直して口を開く。

「魔王だなんて、言いませんよ。でも、勇者様は、私……“金の瞳の少女”と、旅する決まりなのです」

「……だから、俺勇者じゃないよ？」

リクの台詞に、リディははぁーっとため息をついた。

「その衣装に、紅い髪、紅の瞳となれば、紅の勇者様じゃないはずがないじゃないですか」

「……」

リディの言葉に、リクは固まった。

「……赤い髪？ 赤い瞳？」

リクの問いに、はい、と頷くリディ。「ごそごそと鏡を取り出し、リクに見せる。

「ほら、紅の髪に、紅の瞳でしょう？」

曇り一つない鏡に映っているのは、確かに紅い髪で、紅い瞳のリクだった。

「嘘……だろ」

でも、部活の決まりで髪は真っ黒なはずだった。もちろん、日本人なんだから瞳だって黒だ。

でも、鏡に映っているのは紛れも無い自分。髪と、瞳の色が変わっただけの。

「なんだよ、これ……」

無意識に自分の髪や目、服を触ったリクは、かさかさという紙の感触に気付く。

「なんか、入ってる……？」

シャツのポケットに、差出人のいない白い封筒が入っていた。確か、生徒会長に届けた封筒と同じ。

でも、今度の宛名は“柏葉リク様”だ。

ごそごそと開けると、中には一枚の白い紙。その紙に一文だけ、

ぽつりと書かれていた。

“ゲームスタート”

1・金の瞳の少女（後書き）

初めて、二人を主人公とする小説を書いてみました。

最初は、“紅の勇者”であるリクの話です。雪の話は、もうちょっと後になります。

2・神様の遊戯

「ゲーム……スタート？」

リクは、ぽつりと呟いた。意味が分からない。“ゲーム”とは、何のことだろうか。

「やっぱり、勇者様じゃないですか」

リディはにっこり笑って、突然リクの腕をぐいぐい引っ張る。

「うわっ、ちょ、何？ 君、何か知ってるの？」

「君じゃなくて、リディです」

リディは少しむくれて抗議する。

「あー……リディ。これでいい？」

「はい」

にっこりと頷くリディ。先程の問いをもう一度すると、今度は笑顔で答えてくれた。

「私は、“金の瞳”を持つ者ですから。この“クラリス”には、昔から言い伝えられてきた話があつて……」

「ちよっと、待って待って、“クラリス”？ さっきも不思議に思っただけ……」

リクは慌てて話を遮った。リディは一瞬きょとんとして、こくつと頷く。

「はい。“クラリス”は、この世界です。この、私達が立っている大地、海、空、全てが“クラリス”です」

つまり地球のようなものか、と、リクは頭の中で勝手に納得した。納得したことを読み取ったのか、リディは話を続ける。

「その言い伝えられていた話は、“勇者と魔術師の話”なんです。言い伝えはこう伝わっているんです。

100年に一度、異界より一人の“紅の勇者”と、一人の“白の魔術師”が来る。彼らは元の世界へ変える為、“神の神殿”を探すことになる。

“金の瞳の少女”は、その旅に同行せねばならない。“金の瞳の少女”がいなければ、彼らは神殿へとたどり着くことはできない」

リディは一気にそこまで言って、ふうと息を吐きだす。

「そこまでしか言い伝えは伝わっていません。

でも、私はリクさんと一緒に旅する運命なんです。一目で分かりました。リクさんが勇者様だと」

リクは、無言で目の前の少女を見つめる。ぼうつと、「どこの世界でも勇者像は一緒なんだな」とくだらないことを考えた。

「……あのさ」

「はい？」

「……俺、勇者になる理由も動機もないんだけど、なんで俺が勇者なの？」

リクの言葉に、少しリディは考え込む。結局、

「神様が、リクさんを選んだんです。これは別名“神様の遊戯”^{ゲーム}とも言われていますから。」

暇な神様が、勇者と魔術師を使って遊んでいると。天から、その様子を見ていると」

と彼女は答えた。無神論者なリクは、突然神様と言われてもピンとこない。

大体、部活の試合前には神に祈っても、本気で信仰しているわけではないのだ。

「……」

「あ、信じてない顔ですね」

「……だって急に、あなたは勇者です。神様に暇させないように旅してください。って言われても……」

頭を搔いて、空を見上げる。空だけは、元の世界と同じだった。

「でも、神様はいますよ。」

リクさんはいままで不思議に思っただけですけど、自分の言葉、どう思いますか？」

「言葉って……」

なんだよ、と言いかけて、リクは口をつぐんだ。

今まで普通に話していたのが不思議なくらい、おかしい言葉を喋っていた。

リク自身は日本語をしゃべっているつもりだ。なのに、なぜ……。リクの表情を見て、リディはにっこりとする。

「ね、不思議でしょう？ リクさんがここの言葉を喋れるように

なったのも、神様のおかげなんですよ。こんなこと、神様にしか出来ません」

「確かに言葉のことは不思議だけど……うーん……」

思わず、地面にごろりと寝転がる。真上から、リディの顔が覗いた。

「とにかく、一緒に旅をしましょう？ リクさん。

私、わくわくしてるんですよ？ “金の瞳”を持っている少女も、勇者様が魔術師様が現れなければただの町娘。ずっとこの小さな田舎町でずっと暮らすんだと思ってました。

でも、リクさんが現れた。つまり、“神の神殿”を目指してクルリス中を旅出来るんです」

瞳をきらきらさせて語るリディ。金の瞳が、更に輝く。

リクはうーんと唸って、リディを見つめた。しばらくして、はあーっとため息をつく。

「分かった。リディのことを信じてみるよ。

でも、その“リクさん”てのと、敬語やめない？ 俺、普通にこうやって話してるしさ」

リクの言葉に、一瞬きょとんとしたリディはすぐにまた笑顔になる。

「うん、リク。これでいい？」

敬語を使わなくなった少女は、今までと随分印象が違って見えた。

「うん、それで」

リクは親指を立ててにかつと笑う。リディはあつと呟いて、

「じゃあ、まずはお兄ちゃんに会いに行きましょう？ リクのこと、紹介しないと！」

と言った。

「お兄ちゃん？ リディ、兄弟いるんだ？」

リクの問いに、リディはこくつと頷く。

「うん、私より2歳上の、17歳で……」

「……え、ちよつと待って、てことはリディって15歳？」

リクは慌てて訊ねた。さっき、同い年の17くらいかも、思ったが違ったらしい。

リディはこくんと頷いて、

「私は15歳よ？ リクは私より年上っぱいね、大きいもん」

と答えた。確かに、リディは小さい。15歳の平均身長よりも数？小さいだろう。154？くらいだろうか。それに対してリクは170？はあるので、身長差はすごい。

「いや、それはリディが小さいからだと思うけど……へえ、お前15歳だったのかあ」

リクはそう呟いて、自分よりかなり低い位置にあるリディの頭をぽんぽんと叩く。

「な、なにするのっ、馬鹿にして!」

顔を真っ赤にして怒るリディ。リクはけらけらと笑った。

「リディのお兄ちゃんて、17歳だよな? 同い年かあ……俺、早生まれだから学年は違うかな」

そんなことを呟きながら、町を見つめる。これから、想像も出来ない旅が待っていると思うとわくわくした。

そんなことをしている間にも、リディの頭をぼんぼんする手は止めない。

「もう、いい加減にしてよ! それより、お兄ちゃんのところに行きましょう」

リディはリクの手を振り払って、町へずんずん歩きだした。

「ちょ、ごめんごめん! リディ!」

リクは、慌ててリディを追いかけた。

2・神様の遊戯（後書き）

次は、リディのお兄ちゃん登場です。

あと、お気に入り登録してくれた方、評価してくれた方、本当にありがとうございます！！

これからもしようしくお願いします。

3・リディの兄

リディの家は、町のはずれの方にある一軒家だった。
薄黄色の壁は、所々ペンキがはがれている。煙突からはもくもくと煙が上がっていた。

「お兄ちゃん！」

リディは勢いよくドアを開ける。がちゃんというやかましい音に、テーブルに座っていた青年は本から顔を上げた。

リディと同じ、茶髪だ。顔もそっくりだが、瞳の色だけは違った。青年の瞳は、澄んだ茶色だ。

「リディ？ どうし……」

青年は、リディの後ろから現れた者を見て固まった。紅い髪に、紅い瞳の青年。

「その人……まさか……」

兄の言葉に、リディは頷く。

「そう、勇者様が来たの。リクよ」

リクは一步前に出て、青年に頭を下げる。

「あの、はじめまして。俺、柏葉リクです。勇者って言われて……」

青年は、リクを上から下までじろじろと眺める。しばらく眺めてから、ようやく名乗った。

「僕は、リディの兄のシス。シス＝ローレンス。よろしく」

そう言っ、シスは右手を出す。しばらくして握手を求められていることに気付いたリクは、慌てて右手でその手を握った。二回ほどぶんぶん振って、離す。

「お兄ちゃん、私、リクと旅するんだよね？」

リディがシスを見つめて訊ねた。シスはうーんと唸る。

「それが言い伝えだけど……僕は、反対だな」

予想外の答えに、リディは目を丸くする。

「お、お兄ちゃん！ 神様に逆らうの？ だって、私がリクと旅するのは決まりでしょ？」

「といつても……」

シスはリディとリクを交互に見つめる。そしてはあっとため息をついた。

「決まりだつて、知ってるよ。でも……僕は、こんなどこの誰かも分からない奴にリディを預けたくはないな」

シスの思いも、当たり前だろう。リクはどこからやってきたのかすら曖昧な、ただの青年だ。

勇者といえど、兄としては心配だろう。
でも、リディは頬を膨らませ抗議する。

「リクは勇者様よ？ それだけで十分じゃない。いいでしょ？
ね、お願い。」

勇者様なんだから、絶対強いに決まってる！ ね、そうでしょ？」

いきなり話を振られ、リクはうろたえた。そうでしょ？ などと聞かれても、うん、そうだよなんて答えられない。

「えっと……分からない」

だから、おろおろとしながらも素直に言った。リクは、現実世界では剣道部のエースだった。でも、この世界で強いかなんて分からない。

シスは、リクを目を細くして睨む。

「じゃあ、やっぱりリクにリディは任せられない。旅なんて、そんな柔なものじゃないんだ。」

魔術師だっている。強くない奴に、リディと旅だなんてさせられない

それに……旅に出なくても、たださえリディはいろんな奴らに狙われやすいんだ」

兄としての、心配ゆえの言葉だった。後半の言葉に、リクは眉をひそめた。“ただでさえ狙われやすい”とは、どういうことだろうか。

でもリディは、そんな言葉の意味を訊ねることも無くむくれて反論する。

「そんなこと言わないでよ。リクは強くて強くなくても、“勇者”なの。」

そして私は“金の瞳”を持っているの。これは、運命なのよ。神様の定めた運命。抗えないって、お兄ちゃんだって分かってる癖に」

「でも、僕は……」

シスは視線を泳がせる。シスにだって、分かっていた。この二人が共に旅するのは運命だと。

でも、やっぱり心配だ。

しばらく考え込んで、はあっとため息をつく。

「分かった……。リク、僕と決闘をしよう」

シスの言葉に、リクとリディは固まった。

“決闘”という聞き慣れない言葉が、リクの頭の仲をぐるぐる回る。

しばらくして、やっと口が言葉を紡いだ。

「決闘って……シスと？ 俺が？」

リクの問いに、頷くシス。リクは、たっぷり10秒は沈黙した。

そして、

「馬鹿じゃねえの！？ 決闘！？ そんな危ないこと出来るかよ！」

と、シスに怒鳴る。

シスは慌てて、

「決闘と言っても、もちろん真剣じゃない。木刀でだ。それだっ

たら、致命傷は負わないだろ？

僕に勝ったら、リクは強いと認めるよ。でも負けたら、リディと旅することは諦めてくれ」

と言う。でも、リクは考え込んだ。

「でも……決闘って……。ていうか、リディ意外に“金の瞳の少女”を探せて……」。

そんなにころころ見つかるものでもないだろ？ それに、リディは旅したいって……」

「そうよ！ お兄ちゃん！」

リクの言葉にかぶせ、リディも言う。

「私は旅をしたいの！ 一生田舎町にいるより、ずっと楽しいわ！それに、お兄ちゃんに勝つなんて、いくらリクが勇者様でも……」

リディの後半の台詞に、リクの耳はぴくりと動いた。

「ちょ、待つて。シスって、そんなに強いのか？」

リクの問いに、リディは当然といった顔で頷く。

「お兄ちゃんは、この町一の剣の使い手よ。しかも、剣だけじゃなく弓も凄いの。」

この町一の武道の使い手って言った方がいいかも。

剣の大会でも弓の大会でも、お兄ちゃんに勝つ人はいないんだから」

そう語るリディの顔には、兄を誇る笑顔が浮かぶ。リクの額を、

冷や汗が流れた。

「そんなの、勝てねえよ……」

自信なさげに呟くリクを、リディは睨んだ。

「決闘前からそんなこと言わないでよ。私は、絶対にリクと旅したいんだから」

「でも、そんなこと言われても俺は……」

おろおろとするリクと、そんなリクを睨むリディ。シスは二人を見てため息をついた。

「とにかく、広い所に行こう。木刀なら僕が二本持つてゐるから」

シスの言葉に、リクはしぶしぶ頷いた。

3・リディの兄（後書き）

シス登場ですっ！！

……いきなり決闘なんて展開になりましたが（^^;）

……あと、はい、もう、名前のセンスなんて突っ込まないでください。

作者の脳内で西洋名前がなくなってきました……（泣）。

4・決闘

「いいか、相手に致命傷を負わせるような状況になったら、勝利だ。もちろん、本当に突くとかはしないこと。いいね？」

シスの言葉に、リクは頷いた。決闘場所にと選んだ空き地には、町民も少し集まって、二人の決闘を見ている。リデイも、心配そうな目で二人を見ていた。

「シスの相手はだれだ？」「見ねえ顔だな」「ちよつと待て……あの髪にあの瞳、“紅の勇者”じゃねえか!？」「まさか、遊ゲームが始まったのか?」「嘘だろ……勇者が……」「いつかはくると思っていたが……」

そんな囁きが聞こえる。リクは、顔が赤くなるのを感じた。しかし、

「シス相手とは……無謀な奴もいたもんだ」「遊ばれて終わりだな」「いや、遊ぶまでもないだろう」

そんな囁きも聞こえる。シスはどれほど強いのだろうか、と、リクは不安が倍増した。

そんなリクの不安も露知らず、リデイの声が空き地に響き渡る。

「それでは、これよりシスⅡローレンスとリクⅡカシバの決闘を開始します。……初め!!」

ざわざわとしていた民衆は、一気に静かになる。虫の鳴き声さえも聞こえるような沈黙が、辺りを包みこんだ。

リクは深呼吸して、心を落ち付かせた。初めて握る木刀。使っている竹刀とは、もちろん感覚が違う。

“ 剣先を下げるな ” そう心の中で呟いた。

「 …… 痛かったら、ごめんな 」

シスがそう言って、動いた。リクは慌てて構える。かーんと、木刀と木刀のぶつかり合う音が空き地に響いた。

「 …… ツ、く …… 」

リクの想像以上に、シスの攻撃は重かった。手に汗が滲む。なんとか木刀を跳ね返し、間合いをとった。

シスは意外そうな顔をして、もう一度木刀を構えた。

「 …… 今度は、こっちが先に …… ツ！ 」

リクはそう呟いて、一気に間合いを詰めた。シスに向かって、木刀を振り下ろす。

が、シスの木刀がそれを防いだ。ぐぐぐ、と互いに押し合って、また離れる。

「 …… はあっ 」

リクは詰めていた息を吐き出した。汗がぼたぼたと地面に落ちる。肩が大きく上下しているのは、リクもシスも同じだった。

「 けっこうやるね 」

シスがリクを見つめて呟く。

「そつちこそ。……これでも俺、剣道部のエースなのに。……自信、なくなったじゃねえかよ」

リクも少し笑みを浮かべて言う。「剣道部」という聞いたことのない単語にシスは少し首を傾げ、

「剣、てことは……少しは、心得があるんだ？」

と訊ねる。リクは頷いた。

「まあ、シスの想像してる剣とは違うと思うけどね」

「へえ……まあ、それは今関係ないよ」

シスはそう言うのと、一気に間合いを詰めた。勢いよく突き出された木刀を、リクは紙一重で避ける。

「リク……ッ」

リディは両手を握りしめ、二人の様子を心配そうに見ていた。

「リディ……あいつ、“紅の勇者”だっけか……やるなあ」

リディの隣のおじさんが言う。リディは頷くが、それでも心配そうな表情は消えない。

「お兄ちゃんが息を切らしてるのなんて、初めて見た。でも……やっぱり、お兄ちゃんには……ッ」

リディの金色の瞳に、激しくぶつかりあう木刀と木刀が映る。

重なった二本の木刀は、ぐぐぐと互いに押し合う。

「……くっ」

リクの口から、思わず声が漏れる。次の瞬間、シスの木刀がリクの木刀を弾き飛ばした。

数メートル先に、からんと音をさせて落ちる木刀。丸腰になったリクの喉に、木刀が付き付けられた。

「勝負、ついたな」

シスの言葉に、リクは少し震えて頷く。
一瞬のちに、民衆がわつと沸いた。ただ一人、リディの表情だけが浮かない。

「リディ……」

「ごめん、と言おうとしたリクに、シスが呼びかけた。

「……リク」

「ん？」

振り向いたリクに、シスは思いもよらない言葉をかける。

「リディと旅、してもいいぞ」

リクはぼかんとシスを見つめた。数秒間、その言葉の意味を考える。

そして、やっと口を開いた。

「でも、俺、シスに負けたんだぞ？」

その言葉に、シスは頷く。

「シスより、弱いんだぞ？」

また、頷く。

「僕に勝たなきゃリディと旅はさせない、って言ったの、シスだぞ？」

また。

「……本当に？ そりゃあ、リディと旅したいけど……いいのか？」

「何回言わせるんだか。良いって言われたら、素直に受け入れろ」

シスはため息をつきながらそう言い、リクの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「そりゃ、僕はリクに勝った。リクは僕に負けた。だけど、あそこまで戦ったのって、今までリクだけなんだ。だから、そこまで弱いと思わないし」

シスの言葉に、リクの目はだんだん輝いてくる。
成り行きを見て、リディも駆け寄って来た。

「いいの？ おにいちゃん。私、リクと旅しても」

嬉しさを隠しきれない声で、リディは兄に問う。シスはそんな妹

の様子に苦笑気味に頷いた。

でも、とシスは口を開いた。リクとリディは同時にシスを見る。

「僕も、二人の旅に同行する」

シスの言葉に、リディは目を丸くした。

「え！ お兄ちゃんも！？」

リディは思わず、裏返った声で叫んだ。

「ああ、だって、リク一人に任せておけないだろ。僕がいつしょでもいいか？ リク」

「別に構わないけど……」

シスに訊ねられ、リクは戸惑い気味に答える。

「お兄ちゃんもかあ……」

リディは不満そうに兄を見つめる。シスのことは好きだが、過保護にされることは嫌いだった。

「そんなに不満そうな顔をしない！ じゃあリク、とりあえず僕の家に帰ろう。」

今すぐ出発出来るわけじゃないし」

シスはそう言って、自分の家へ向かう。その後ろに不満げなリディと少し戸惑い気味のリクが続いた。

4・決闘（後書き）

シスとリクの決闘で、一話まるまる使いました（笑）。

そして、祝・お気に入り件数二桁突破！！

ありがとうございます！

……戦闘描写って、どうやったら上手くなるんだろう（涙）。

5・旅立ち

「でも、改めて見ると凄いな……」

シスはリクの服装を見て呟く。横で、うんうんと頷くリディ。

「旅をするのに最適な服装だね。マントもシャツも上等だし……さすが神様」

そんなことを言われても、布の価値などリクには分からない。だからそんな会話を聞いて思うのは、

「やっぱり、異世界なんだなあ……」

それだけだった。ぼうつと呟いたその言葉を聞いて、リディは荷物から目を上げる。

「そっか。リクの世界とは、全然違うよね。少し、説明した方が良い？」

「あ、うん、頼む」

リディの言葉に、リクは頷いた。

「ここクラリスは、大きな南の大陸……私達のいる大陸と、北の大陸で出来ているの。」

南の大陸には、大小10以上の国があつて。今私達のいるのは、ハルゼン王国っていう、小さな国。

そして、この町は隣国のシャイア王国との国境近くよ。

シャイア王国は、この南の大陸で2番目に大きな国なの。広大な森にはエルフもいるって聞くし……。

とにかく、大きいし、豊かな国なの。

北の大陸は、シュテルゼ皇国という巨大な皇国が支配しているわ。謎の多い国だから余りよく知らないけど、その国によって、滅んだ国も多いみたい」

リディは服をたたみながら、そう説明する。

「へえ……シュテルゼ皇国か……。俺らが目指してるのは“神の神殿”だろ？ それはどこにあるか……」

「知らないわ」

リクの言葉を遮って、リディは言う。

「“神の神殿”の場所なんて、誰も知らない。100年に一度、勇者様と魔術師様が来た時だけ現れると言われている神殿だもの。だから、まずは“神の神殿”へ行くヒントを探さない」と

リディの言葉に、リクは目の前が真っ暗になった気がした。旅するのに行き先の場合が分からないなんて、目的地に着くまでどれだけかかるんだろう。

そんなリクの様子を見て、リディはなぜか微笑んだ。

「大丈夫だよ。私がいるから。“金の瞳の少女”は、“神の神殿”への道標だから」

「でも、リディは場所を知らないんだろ？」

リクが心配そうに問いかけても、リディは

「不思議なことってね、けっこう起こるんだよ？
私がどんな道標になるか分からないけど、必ず辿り着けるに決ま
ってる」

と、意味深に微笑むだけだった。

旅支度を整えると、もう昼過ぎだった。
日が暮れる前に国境を越えてしまおう、というシスに、リクは

「それより、シスやリディの両親は？ 勝手に旅に出ることにし
ちゃったけど、いいのか？」

と訊ねた。この家には、リディ達の両親が暮らしている痕跡は無
かった。

もしか、聞いてはいけなかっただろうか？とリクが思った瞬間、

「お母さんもお父さんもいないわ。2年前に死んじゃったの」

リディが、予想通りの答えを口にした。

ごめん、ともごも言うリクに、リディは微笑む。

「いいの。もう2年も前のことだから」

リディはそう言ったが、なんとなく空気は気まづくなった。
そんな二人を見たシスはリクの肩を叩いて、

「ほら、さつさと行くぞ」

と笑顔で言った。リクは顔を上げて、うん、と頷いた。
じゃあ、とリディが話し出す。

「シャイア王国に行つて、情報を集めましょ？
あそこには大きな街もいっぱいあるし、交易も盛んだわ。ハルゼン王国よりも情報がたくさん集まるはず」

リディは馬に荷物を括りつけながらリクに言う。が、この世界のことを全然知らないリクは、そう言われてもどれが正しい道なのかよく分からない。

なんとなくシスに目線を移すと、シスは苦笑した。

「僕に問わないでよ。これはリクの旅なんだから」
「でも、俺全然……どう行けばいいのか……」

おろおろとしているリクを見て、リディははあっとため息をついた。

「もう。お兄ちゃんとの決闘の時はかつこよかったのに、なんで今はそんなに自信無さげなのかなあ……。もっと自信を持って旅しようよ」

「そう言われても……俺方向音痴だしなあ……」

リディの言葉に、リクは頭を掻きながら苦笑する。
そんなリクを見て、再度ため息をつくリディ。

「方向音痴って……今は関係ないでしょ。とにかく、もっと自分に自信を持つて！」

びし、と指を突き付けられ、リクは苦笑して頷いた。

国境には、数人の国境兵がいた。

鉄の鎧を着て、槍を持った国境兵。リクには、見慣れない光景だ。リクは、マントのフードを深く被り直した。町を歩いている時、瞳の色と髪の色が目立って騒がれたのでフードをかぶっていたのだ。先頭のシスは、もう国境の門に辿り着きそうだ。

「止まれ！」

そう兵士に怒鳴られ、シスは足を止めた。

「ハルゼン国民だな。名前と国境越えの理由を言え」

兵士はそう言いながら、羊皮紙とペンを持つ。

「シス」ローレンス。そしてこの娘が妹のリディ「ローレンス。そして……“紅の勇者”のリクです。えっと……名字、なんだったか？」

「柏葉です。柏葉リク」

シスに囁かれ、リクは慌てて名乗る。兵士はぽかんとリクを見つめた。手からペンと羊皮紙が落ちる。

「あ、“紅の勇者”？ 来たのか？ 勇者が。お前は、本当に…

…？」

兵士は口をぱくぱくさせる。他の兵士達も、ざわざわと騒ぎだした。

「ゆ、勇者、そのフードを取れ！ 瞳の色と髪の色を見せろ！」

兵士の言葉に、リクはしぶしぶフードを取った。フードの下から紅い髪の毛と、紅い瞳が現れる。

ひ……と、兵士は後ずさった。

金の瞳を持っているリディヤ、その兄であるシス、そして“金の瞳の少女”と同じ町で暮らし続けてきた町人達と違い、兵士にとって“紅の勇者”は異質な存在なのだろう。

「ほ、本当に……。じゃあ、どこかに“白の魔術師”も……ッ」

「な……ッ、魔術師が！？」

「そりやそうだろう。“紅の勇者”がいるんだ。“白の魔術師”がいないわけがない」

「でも……魔術師のせいで100年前は……ッ！！」

兵士達の囁きが聞こえる。

「魔術師のせいで……？」

リクは、思わず呟いた。“魔術師のせいで100年前は……ッ”と、兵士は言っていた。何があったのだろうか。

しかし、結局リクの疑問は解消しなかった。

「でも、これで、僕達が国境を越える理由は分かって頂けましたか？」

シスの問いに、兵士達は頷いた。

「ああ、よく分かった。勇者……リク、だっけか。頑張れな。魔術師に負けんなよ」

兵士達は口々にそう言っ、リクの肩をばんばん叩く。

「あ、ありがとうございます……」

兵士達の言葉に送られて、リク達はハルゼン王国を後にした。

「ここが……シャイア王国……」

リクの隣で、リディが金の瞳を輝かせ、感極まって呟いた。

5・旅立ち（後書き）

旅始まりました。

ここからどんなこの世界のことを詳しく出して行けたらな……と
思いつつ、書き進めて行きます（笑）。

祝、50ポイント突破。ありがとうございます……！

6・国立図書館

リクの隣でリディが瞳をきらきらさせている。

が、リクはそこまで感動しなかった。国境を越えたといっても、見える景色はあまり変わらない。

“違う国に入った”という実感が沸かない。

でも、そう思うのはリクだけなようで、シスも瞳を輝かせていた。

「やっぱり、いままでずっと住んでた場所から離れるってのは寂しいけどわくわくするもんだなあ」

そう言って、うーんと伸びをしている。

リディはたたたと駆けると、

「ほら、リク、お兄ちゃん、行こう！ 早く早く！」

と、先の方で手招きしている。リクは笑って、リディを追いかけた。

まずは街で情報を集めよう、というシスの意見で、一行は国境近くで交易の盛んな街、ナサに来ていた。

「わあ、やっぱり交易の多い大きな街は違うね。楽しい……」

リディはそう呟きながら、きよろきよると街を見回す。

人通りが多く、商人や平民など、たくさんの人間が大通りを歩いていた。ハルゼン王国の服とあまり差がないのは、隣接しているからだろうか。

シスもきよろきよろと街を見回して小さい声で言う。

「……やっぱり、俺らを……リディとリクを、みんな見てるな」

シスの言う通り、街の人々はリディやリクの事を、じろじろと見ていた。

リディの金の瞳はまだしも、リクの真紅の髪と目は街中で目立っていた。国境の門を越えるまではフードをかぶっていたが、街ではかぶっていないのだ。

そもそも、リクのゆったりとしたマントのフードでは、かぶってしまうと視界が狭い。

「なあ……俺、やっぱりフードかぶった方がいいかな」

「うーん……うん、かぶったほうが良いかもな。あまり、目立ちたくない」

シスの言葉に、リクはフードを深くかぶった。

さつきよりは、人の視線が少なくなった。でもやはり、リディの金の瞳はリクほどではないが目立つ。

「……なんか、人から見られるのっていい気しないんだな」

「そりゃそうでしょ。私も、じろじろ見られるのは嫌いだもん。

……まあ、仕方ないんだけどね」

リクの言葉に、リディが苦笑交じりに返した。

「まあそれより、情報集めしよう？ 街でぶらぶら歩いてても、

情報は入って来ないし」

リディはそう言って、またたたたと走り出す。数メートル先に
行つては、早く早く、とリクとシスを手招きする。

「リディ、めちやくちや嬉しそうだな」

リクに言われ、シスは苦笑した。

「あの町から出るのは初めてだからね。僕は仕事で忙しかったか
ら、大きな街へ連れて行ったことがないし」

「でも、リディって15歳だろ？ もう一人で出かけられるんじ
ゃ……」

リクの言葉に、シスは少し哀しげな瞳をした。

「それが、そうも行かないんだ。一人で遠くへ行かすのは……」。

リディは、剣も使えないしね」

「なんで？」

不思議な顔をするリクに、シスは、

「いつしよに旅をしてれば、嫌でも分かる時が来るよ」

と言うだけだった。

「ねえ、今話を聞いていたんだけどね、“神の神殿”について調べたければ、“国立図書館”に言ったらどうかって！」

いつの間にか街の人々から情報を集めていたリディが、きらきらした表情で言った。

「国立図書館？」

シスの問いに、リディはうんつと頷く。

「この国には二つの国立図書館があるらしくて、王都と、ここナサにあるらしいの。」

この街は、このシャイア王国で二番目に大きな街なんだって。だから、まずは図書館に行かない？」

「図書館かあ……」

基本的にアウトドアなリクは、図書館に行ったことがほとんど言うほど無い。

小さい頃から、外で泥だらけになって遊んでいる方が好きだった。読書も、そこまで好きなほうではない。が、何も分からない状態で“神の神殿”を探すより、図書館に行って僅かにでも情報を探した方がいいだろう。

だから、

「うん、俺は図書館に行くのに賛成だ」

リクはこくりと頷いてそう言った。僕も、とシスが言う。

「やった！　じゃあ、早く行こう」

リディがにつこり笑ってリクの手を握りぐいぐい引つ張る。

「おい、リディは読書好きで、本読みだすと止まらないから気を
つけるよ」

引つ張られるリクに、シスがこそつと耳打ちした。

リディに引つ張られ、辿り着いたのは大きな薄黄色の建物だった。
“国立ナサ図書館”と書いてある。象形文字のような文字だが、
リクにも何故か簡単に読めた。

「へえ……大きいな」

シスが瞳を輝かせて図書館を見つめる。どうやら、兄弟揃って読
書好きらしい。

「こんな大きい図書館、初めて見た……」

リディはそう呟きながら、図書館の大きいドアを開けた。
ぎぎぎ、という音と共に、ゆっくりと中の様子が見えてくる。

「うわぁ……」

本がそこまで好きでないリクも、思わず感嘆の声を上げた。
目に飛び込んできたのは、膨大な量の本だった。図書館だから、
たくさんの本があるのは当たり前だ。

でも、この図書館の本の量はリクの想像を上回っていた。
高い天井まで届く大きな本棚に、びっしりと詰まった本。何万冊
……いや、何十万冊もありそうだ。

「凄い！」

リディのテンションはマックスだ。きゃっきゃと騒いで、本棚に
駆けよる。

リクも後に続くこうとして……シスに、肩を叩かれた。
振り向くと、深刻そうなシスの顔。

「どうした？」

リクの言葉に、シスは一人の男を指差す。

「あれ……もしかして……」

その男は、真っ白なマントを羽織っていた。リクと同じような、
ゆったりとしたマントだ。

フードを深くかぶっているため、顔は見えない。
手に、銀色の長い杖を持っている。

「もしかして……」

「ああ、あの格好に杖……たぶん、“白の魔術師”」

シスの言葉に、リクはぐくと唾を飲み込んだ。
思わず、じろじろと見つめる。視線に気づいたのか、魔術師がリ
クの方を振り向いた。

予想通り、フードの下から僅かに見える瞳は、銀色に輝いている。
紅い瞳と銀の瞳が、一瞬、見つめあった。

6・国立図書館（後書き）

大阪からこんにちは、羽月です。

今、大阪の空港のPCからログインしております。

どつきどきです（笑）。

さて、やっと登場です、魔術師さん。…といっても、今はリクの話なので、すぐに退場しちゃいますが（汗）。

ちよいちよい絡んでくると思います。ちよいちよい……。。

7・“白の魔術師”との遭遇

交わった紅い瞳と銀色の瞳は、しばらく見つめあう。

フードの下から僅かに見える魔術師の顔は、どこか懐かしかった。でも、誰かわからない。銀の瞳と銀髪になっているからだろうか。リクが誰か思い出せないうちに、魔術師は歩いた。ゆっくり、こっちに向かってくる。

「あ、の……ッ」

誰ですか？ そう聞きたかったが、上手く口が動かない。魔術師はすれ違いざまに、

「またな……柏葉」

そうリクに囁いてふっと笑った。

「何で……ッ？」

リクは一瞬固まり、慌てて振り返る。

魔術師は確かに“柏葉”と言った。リクのことを、知っている。

「ちょ、おい……」

追いかけて、腕を掴む。さっきの声も、確かに知っていた。でも、誰か分からない。それが歯痒い。

「お前、誰だ？」

リクの問いに、魔術師は答えない。フードを深くかぶったままだから、顔をよく見ようにも見えない。

「おい……」

「さあ、誰でしょう。……柏葉は俺を、知ってるはずだ」

魔術師はそう言うと、リクの手を振り払う。そしてそのまま図書館を出て行った。

「……なんなんだよ、あいつ……」

リクは魔術師に不快感を覚えながら、リディ達のもとへ戻った。

「あ、リク！ 見て見て、この本！ 凄く面白いお話で……」

リディは、分厚い本を抱えてリクに駆け寄る。

「リディ……本はいいけど、俺達はここに情報を探しに来たわけ……」

「そりゃそうだけど……いいじゃない、ちょっとくらい」

リクの言葉に、リディはむくれる。

「まあ……時間はあるし、いつか」

苦笑混じりのリクの言葉に、リディはぱつと顔を輝かせた。

鼻唄でも歌いそうな雰因気で、本棚へ向かう。

「……本、大好きなんだな」

リクは、いつの間にか隣にいたシスに話しかける。シスは、愛しそうにリディを見ながら頷いた。
が、

「……なあ」

すぐに、その表情は一変する。

「さっきの、やっぱり“白の魔術師”だろう？」

厳しげな表情のシスに、リクは頷く。

シスは、はぁーっと息を吐いた。

「なんか、嫌な感じがするんだよね……」
「嫌な感じ？」

リクの問いに、シスは頷く。

「リクは感じなかったか？ 魔術師から」

「俺は別に……」

シスは、そっか、と呟いて、魔術師の出て行った扉を見つめた。
どこか話しかけづらいシスの様子に、リクも黙り込む。

「……あの」

その沈黙を破ったのは、柔らかい女性の声だった。

リクが振り向くと、そこには図書館の係員らしき女性。頭の上にお団子にしてある髪が印象的だ。

「何か、お探ですか？」

図書館員は、にこつと微笑んでリク達に訊ねる。

「あ、えつと……あの、“紅の勇者”とかそういうことの本って……」

おろおろしながら言うリクの言葉に、図書館員はぽんと手を打った。

「ああ、あなたも、神様の“ゲーム遊戯”本なのですね。こちらです」

図書館員はにっこり笑って、本棚の間を歩く。リクは、慌ててついて行った。

「資料はあまり多くないんです。この一冊しか、“神様のゲーム遊戯”について書かれている本はありません。ただ、これは毎回書き直されているので、最新ですよ」

少しすまなそうに、図書館員は一冊の本を差し出す。茶色い表紙に『100年に一度の“遊戯”について』と書かれていた。

「100年に一度の“遊戯”について……。こ、これ、読んで良いですか？」

「ええ、もちろん」

リクは近くの椅子に座ると、表紙をめくった。たくさんの人々が読んだのか、ページの端は少し擦れている。

字は日本語ではなかったが、やはりすらすらと読めた。

「『この“クラリス”へは、100年に一度、紅き衣を纏った紅き瞳の勇者と、白き衣を纏った銀の瞳の魔術師が訪れる。その見た目から、彼らを“紅の勇者”、“白の魔術師”と呼ぶ。

彼らは神のご意思により、この“クラリス”へ来たと考えられている。

彼らはこの“クラリス”のどこかに存在するという“神の神殿”を求め、旅をするらしい。

その“神の神殿”へたどり着くには“金の瞳”を持っている少女が必要とされ……」

ぶつぶつと音読をしていたリクは、はぁーっとため息をつく。

「だめだ。リディに説明されたのと同じことしか載ってない……。それがちよつと詳しく載ってるくらいか……。

なんか、新しい情報ねえのかな……」

図書館に期待していただけに、新しい情報が得られなかったのは痛い。

何度もため息をつきながら、パラパラとページをめくる。

「……ん？」

なんとなく、気になったページがあった気がして、戻った。

「……これ……『100年前の遊戯で、“白の魔術師”は、その名を悪名として、クラリス中に響き渡らした』……」

リクの脳裏に、国境を渡るときの兵士の言葉が過ぎる。

“魔術師のせいで、100年前は……ッ!!”

兵士は、確かにそう言っていた。“魔術師に負けるなよ”とも。その言葉の意味が、分かる。リクは、慌てて文字を追った。

「『一番新しい遊戯の時の“白の魔術師”は、絶大な力を持っていた。』

そして、冷酷な心の持ち主でもあった。彼は新しい地に行くたび、“神の神殿”を求め、その地を焼いた。彼の旅した後、その地には草一本残っていなかった。

そして彼は、シャイア王国のエルフの森で、史上最悪の事件を起こした。

エルフは、この“クラリス”が生まれた頃から存在しているという、最古の種族だ。

深い知恵と長い寿命を持ち、人とは離れた暮らしをしている。

“白の魔術師”は、エルフの森に入ると“神の神殿”についての情報を求めた。

“クラリス”の生まれた頃から存在しているエルフは、人間よりも遥かに情報を持っていたからだ。

望む情報を聞き出した“白の魔術師”は、彼らに礼を言うでもなく、なんと惨殺した。

数百人いたエルフは、数十人までに減ってしまった。

深い知恵を持つ彼らが大勢失ってしまったのはこの“クラリス”の大きな損失だ……」

そこまで読み終えて、リクは息をついた。

エルフなんていう現実味の無い種族が出てきたが、100年前の

“白の魔術師”がとんでもないことをしたというのは分かった。

そして、もう一つ。エルフは、“白の魔術師”の求める情報を与えたと書いてあった。

それはつまり……、

「……エルフに会えば、何か分かる……？」

7・“白の魔術師”との遭遇（後書き）

“白の魔術師”やつと登場（^ ^;）
すぐに引っ込んだじゃいましたが（汗）。

そして……宣言します。

もう、二日おき更新なんて言いません。いえ、出来ません（おい）。

8・他人の目

「エルフ？」

リディは目を丸くして、リクを見つめる。
リクはこくんと頷いた。

「ああ。本にも書いてあったんだけどさ、エルフならいろいろ知ってそうだなって。

それに、シャイア王国に住んでるんだろ？ 丁度いいじゃん」

リクの言葉に、リディとシスは顔を見合わせる。
そして、シスが言い辛そうに口を開いた。

「あの……エルフは、人と会うのを嫌がるんだ。リクの持つてる本にも書いてあっただろ？」

「え？ ああ、そういえば。でもさ、まあ行ってみねえと分かんねえし、とりあえず。

ほら、本によると、エルフを惨殺したのは魔術師なんだろ？ 俺、勇者だし」

苦笑してリクは言う。そう上手く行くとも思えないが、情報が少ない今は少しの可能性にも賭けるしかない。

「それもそうだね。じゃあ、早くエルフに会いに行こう！」

リディが満面の笑みで言う。

「リディ…… エルフに会いたただけだろ……」

リクはそんなリディを見て、苦笑混じりに呟いた。
シスはそんな二人を見ていたが、ふいに言う。

「あ、でもエルフの森って、そんなに近くないぞ」
「……え？」

きょとんとしたリクに、シスは頷く。

「シャイア王国は広いから。ここナサは南の国境の近くなんだ。
ハルゼン王国は、シャイア王国の南にあるから。
でも、エルフの森は西の端にある。気が遠くなるほど遠いってこ
とはないけど、近いとも言いがたい。」

一日で辿り着けると思ったら、大間違いだぞ？」

シスの言葉に、リクはそんなあと落胆した。

まだこの世界に来て一日も経ってないが、おそらく旅が楽なもの
ではないということは想像できた。

「まあまあ、そんなに落胆しなくても……ほら、シャイア王国は
豊かな国だから、旅も絶対に楽しいよ？ 観光スポットもたくさん
あるし……」

リディが苦笑して、リクの背中をぼんぼん叩く。慰めてくれてい
るらしい。

「でも……そりゃ、違う国に来るのは楽しいけど……。遠いかあ
……」

まだ落胆しているリクを見て、シスはあーっとため息をついた。

「リク、ぶつぶつ言うのは後にしよう。図書館にいる間に、もう夕暮れだ。」

日が暮れるまでに宿を探すぞ」

「ねえお母さん、見て見て！ あのお姉ちゃん、きらきらの目してる！ きれいだね？ いいなあ、ぼくもあのお目々欲しい！」

「ちょ、だめよ、見ちゃ。良い？ 絶対近づいたらだめだからね。特に、あの赤いマントのフードを被った人はだめよ。分かった？」

広場を歩いていると、そんな会話が聞こえた。リクとリディは、思わず顔を見合わせる。

「なんか、俺、フード被ってる意味なくない？」

リクの言葉に、シスは苦笑を返す。

「まあ、その真紅のマントだと、分かっちゃうよな。“金の瞳”のリディまでいるし。」

ほら、気付いてんのはあの親子だけじゃないっばいし」

シスに言われ辺りを見回すと、町人達が距離をおいて、リク達を見ていた。

あまり、好意的な視線は感じられない。

「ねえ、お兄ちゃん。なんでみんな私達をあんな目でみるのかな」

リディは少し頬を膨らませて言う。

「神様の遊戯^{ゲーム}”は、皆に望まれているものじゃないしな。

リディは旅が出来るって喜んでるけど、リディみたいな奴の方が珍しいんだよ。

勇者と魔術師の戦いで、いろんな街がぼろぼろになっちゃうからなー……」

シスの言葉に、リディはそうだよね……と俯いた。

「リク、良い人なのに。先入観だけで判断するなんて、酷い！
リクもそう思わない？」

リディは隣のリクを見上げる。身長さがかなりあるので、首が痛そうだ。

必死に上を向いて見つめるリディを見て、リクは思わず笑いを漏らした。

「あ、ちょっと、何で笑うの！ あんな視線にさらされて、リクは嫌じゃないの？」

むうつと頬を膨らませるリディ。

「いや、そりゃあ俺だって嫌だよ。でも、ほら、今笑っちゃったのはさ……」

「笑っちゃったのは何？」

リディはズい、と顔を近付ける。と言っても、背伸びをしている

のでひよこひよこことよろめいていた。

「ぷは、ちょ、リディ、それ可笑しいって」

リクは思わず吹き出し、リディは顔を真っ赤にした。

「ちょっと、酷いよリク！ 私はリクのこと心配して文句言ったのに！」

真っ赤になって起こるリディ。やっと笑いの収まったリクは、

「まあまあ。でもさ、可愛かったよ。だからいいじゃん」

と言う。リディはむっとした表情になった。

「今更可愛いなんて言っても、無駄だからね！」

そう言っ、すたすた先に歩きだす。

「あ、ちょ、本当だって！ ごめんごめん！」

リクはそう叫んで、慌ててリディを追いかけた。

8・他人の目（後書き）

なんとか早めに更新（＾　＾）

そして、新作出来ました。

「天然王女の婚約者。」

<http://ncode.syosetu.com/n3746x/>

こちらも宜しく願います。

9・宿探し

「広い街だから、宿なんていっぱいあると思うし、すぐ見つかるよ」

シスはそう言って、足取り軽く街を歩く。

リクも、そう思っていた。……が、現実はそこまで甘くなかった。

「……あんた……勇者かい？ 俺は面倒事に巻き込まれるのは御免だ。すまないが、他をあたってくれ」

「嫌よ、うちにあんたらを泊めるなんて。勇者が来たら、魔術師も来るのよう」

「うちにお前らを泊めるか！ 他に行け！」

宿を見つけるはいいが、泊まらせてくれない。

かれこれ5件ほど、宿を回っていた。

「……なあ、勇者って何でこんなに嫌われてんだ……？」

げっそりして、リクは呟く。

「まあ……100年前の遊ゲームが酷かったからね……」

シスは苦笑して呟く。

リクはそくだよなあと言きかけて、ん？ と止まった。

「勇者も？ 本には、“魔術師が大虐殺を”みたいなことが書いてあったけど……」

うーんと唸って、シスは言い辛そうに言う。

「まあ、一番ひどいのは“白の魔術師”なんだけど……魔術師と勇者は戦って、その戦いが激しかったからいろいろと被害が出たし……何より……」

「何より？」

「魔術師は、勇者を殺そうと“クラリス”中を探してね。いろんな街がぼろぼろになったんだ。だから、魔術師にも勇者にも、あんまり良い印象を抱いてる人は少ない」

シスの説明を聞いて、リクははあーっとため息をついた。
そして

「え！？ 魔術師は勇者を殺そうとした！？ じゃ、まさか俺……」

不安そうなリクに、シスは慌てて手を横に振った。

「いや、今回の魔術師がどうかは分かんないよ。100年前は、冷酷な人だったんだしさ」

「うん……」

シスにそう言われても、リクの不安はあまり無くならなかった。

「あ、ねえ、ほら、あそこに宿があるよ！！ 早く行こう？ もう日も暮れちゃったし！」

話題を変えようと思ったのか、リディがやけに明るい声で町はずれの一件の宿を指差した。

「お、良かった。とりあえず行ってみよう」

シスが笑顔で、宿に向かう。リクも慌ててついて言った。
どきどきしながら、扉をノックする。フードを、深くかぶりなおした。

「……誰だい？」

扉が少し開いて、中年のおばさんが顔を出した。怪訝そうな目でリク達を見る。

「あの、泊めてもらいたいのですが」

リクの言葉に答えず、おばさんはじろじろとリクを上から下まで見る。

紅い瞳をしばらく見つめると、続いてリディの金の瞳をじろじろと見つめた。

そして、シスを軽く見て、扉を大きく開けた。

「早く入んな。あんたらはいいいけど、魔術師まで来たら大変だ」
「ありがとうございます！」

リク達は笑顔で礼を言って、慌てて中に入った。

「……あの」

暖炉で温まって落ち付いてから、リクはおばさんに訊ねた。

「なんで、俺らを入れてくれたんですか？　ほとんどの宿は、俺らのこと嫌だつて言ったのに」

おばさんはリクを一瞥し、ふんと鼻を鳴らす。

「別に。あんたらに警戒を持ってないわけじゃあ無いけどね。まあ、あんたらは魔術師じゃないし、私もあんたらからいろいろ話を聞きたかったからさ。」

それに、こんな町はずれの宿じゃ客はなかなか来ない。だったらどんな客でも入れてやろうと思ってね」

そう言つて、おばさんはにやりと笑う。どうやら図太い神経の持ち主のようだ。

リクはははつと苦笑した。現実世界では、こういうタイプの人間はなかなか見ない。

でも、今はそんな人がありがたかった。

「ほら、シチューが出来たよ。冷めないうちに食べて。そしたら、あんたらの部屋へ案内しよう」

おばさんはそう言つて、木の椀にシチューをよそう。

暖かい椀を、リク達は礼を言つて受け取った。

「……で、食べながら聞かせてくれるかい？　あんた“紅の勇者”の話を」

おばさんは、リクの前に椅子を持って来て座ると、さっそく訊ね

た。

リクは思わずシスの方を向く。シスは“話してやれよ”というように軽く頷いた。

ただ、話すと言っても何を話せば良いか分からない。

「あの、話すってどんな？」

「あんたは、魔術師にどんな感情を抱いてるんだ？」

「……」

直球で聞いてくるな、とリクは苦笑した。

どんな感情と聞かれても、なかなか答えようがない。

「えつと……よく、分からないんですけど。ただ、魔術師は俺の知り合いっぽいんです。」

俺は、誰だか分かんなかったんですけど、魔術師は俺が誰か分かっただけで」

リクの言葉に、おばさんはふーんと頬杖をついた。

「知り合いねえ……。そりゃあ、辛いだろうね」

おばさんの呟いた言葉に、リクは眉を下げた。

「……やっぱり、辛いんですか？俺、よく本に書いてあるみたいに、魔術師と戦う気なんてないんですけど……」

「でも、自然に戦うことになっちまうのさ。私は、この話に興味があつて、調べるなんて大袈裟だけど、まあ調べていてね。」

記録にある遊戯^{ゲーム}は全て、魔術師と勇者が戦ってる。どちらか一方が、死んでるんだ」

そう言って、なぜかおばさんはにやりと笑う。
でも、リクは固まっておばさんを見つめていた。

「……どちらか一方が、死んでる……？」

こんな突飛なことが起こったから、そんなこともあるんじゃないかと、心のどこかでは思っていた。

でも、こうも直球に言われると、やはり怖くなってしまう。

「……リク？」

リデイが、心配そうにリクを見た。

シスは知っていたのか想像していたのか、表情を変えない。

リクは、なんとか口を開く。でも、声はからからに乾いていた。

「それはつまり……どちらかが、どちらかを殺すってことですか？」

リクの問いに、おばさんは当たり前というように頷く。

「俺と魔術師が……知り合い、らしいのに？」

その問いにも、おばさんは頷いた。

9・宿探し（後書き）

お気に入り登録15件突破。ありがとうございます！

おばさん、なんかしゃりしゃり出てきちゃいました……。

元々、こんなにたくさん出る予定じゃなかったんですけど……。

恐るべし、おばさん。

10.“白の魔術師”の正体

「俺が生き残るためには、魔術師を殺さなきゃいけないくて、そうじゃなかったら、俺は魔術師に殺される……？」

リクは呆然と呟いた。

人を殺す、だなんて、簡単に決心できることではない。しかも、魔術師は知り合いかもしれないのだ。

「それ……それ以外に、俺が……俺も魔術師も、平和に元の世界に帰る方法はないんですか？」

「ない。私が聞いた限りでは、そんな方法はないね。“神の神殿”は、勝者の前に現れるんだ」

リクの僅かな期待を、おばさんは粉々に砕く。

「……え、俺、どうすれば……」

パニックになって、リクは思わずリディを見る。リディも、困った顔をしていた。

次にシスを見たが、シスは首を横に振るだけ。覚悟を決めろ、ということか。

「でも……シス、俺……だって、魔術師って人間だぜ？」

リクは、縋るような目でシスを見た。こんな時、シスに頼ってしまうのは、同じ年なのに年上のように思えるからだろうか。

「……リク。お前の気持ちも分かる。魔術師は、知り合いらしい

し。

でも、この世界に来て、この遊ゲーム戯に巻き込まれた以上、覚悟を決めなくちゃいけない。

冷たいこと言ってるって分かってる。でも……それ以外に、どうするんだ」

シスの言葉に、リクは俯いた。シスの言っていることは、正しい。自分が死ぬか、相手が死ぬか。もちろん、自分が死ぬだなんて結論を出せるわけも無い。

でも、やはり、相手を殺すだなんて考えられなかった。

「……まあ、今日は休もう？ リクだって、部屋でゆっくりいろいろと整理したいでしょ？」

難しい顔をしたリクに、リディは明るく言った。

リクは少しリディを見つめ、そうだね、と微笑んだ。

「じゃあ、部屋に案内するよ。ついておいで」

おばさんはそう言うと、ランプを持って階段を上り始めた。

部屋は、ベッドが四つあった。

リクは窓際の一つに潜り込み、深く息を付く。

正面のベッドにシス、その隣にはリディだ。息の調子からして、もう寝ているのだろう。

でも、リクは寝られなかった。

「……はあ」

窓を見れば、驚くほどの星と、煌々と光る月。昨日までは、見たことの無かった空。

一つ一つのこと、違う世界に來たんだと実感する。

「誰なんだよ……あの魔術師は」

寝返りを打って、そう呟く。誰か思いだせない自分にいらした。

「学校の奴……？ いや、だったら分かるよな……近所に住んでるとか？」

ぶつぶつと呟いてみたところで、やはり思いだせない。
……が、ふと思い当たる節があった。

「……手紙」

宛先の無い手紙。リクの手紙には、“ゲームスタート”と書いてあった。

そして、来る直前に、同じような手紙をある生徒に届けた。

「……冬原？」

リクの通っている高校の生徒会長の、冬原雪ふゆはらのせつ。確か、リクは彼に宛先の無い手紙を渡した。

「あいつが、魔術師……？」

図書館で見た、彼の姿。黒髪に置き換えて見れば、彼に見えない事も無い。

声も、全校集会で聞いたことのある声と一致する。手紙を渡した時にも話したが。

「でも……あいつが魔術師だったら……そんなの……ッ」

ぐっと、シートを握りしめる。

ほとんど交流は無かったが、好印象の生徒だった。同じクラスになっていたら、友達になれていただろう。

「どうすりゃ、いいんだよ……」

窓越しに月を見上げ、リクはぽつりと呟いた。

「……リク？」

「……えっ？」

寝ていたはずの、リディの声がした。びっくりして起き上がると、すぐ傍にリディがいた。

「リディ？　寝てたんじゃ……」

リクの言葉に、リディはふふつと笑う。

「寝てただけど、少し目が覚めたら、リクがいろいろ呟いてたから。」

「……魔術師が誰か、分かったんだ？」

リディの問いに、リクは唇を噛み締めて頷く。
そっか……、と、リディは目を伏せた。

「……俺、どうすりゃ、いいのかな……ッ」

思わず、リクはそう漏らした。

「だって……たぶん、魔術師は冬原で……ッ、あいつ、たぶん良
い奴で……じゃなくても、殺すなんて……こんなの、全然、初めて
だし……ッ」

おろおろと、言葉に詰まりながら言うリク。リディは、黙ってそ
れを聞いていた。

「……ごめん、リディ。こんなの、リディに漏らすことじゃない
って分かってる。

でも……なんか、ごめん」

おろおろと謝ってリクは顔を伏せる。

リディは、ふっと微笑んだ。

「謝ることなんてないよ。私は、隠されることは嫌いだから」

「リディ……」

リクは慌てて、緩みかけた涙腺を締める。

「なんか……なんでだろ、違う世界に来て心細いのかな……ッ？
リディが、凄く頼もしく感じる……」

「な……ッ」

リクの言葉に、リディは頬を膨らます。

「それ、どういう意味よ」

「……そのまま」

「ちよつと、リクーっ！」

ふん、とそっぽを向いたリディを、ははっとリクは笑う。

「もう、私寝るからね！」

リディはそう言って、つかつかと自分のベッドへ歩く。
リクは、慌てて呼び止めた。

「リディ！ ……ありがとう、元気出た」

リクの言葉に、リディは振り向いてにこっと笑った。

10・“白の魔術師”の正体（後書き）

やっと、リクくん気付いてくれました。

気付くのはもつと先であつて欲しかったんですけど……書いてると、
「あ、これ気付かなきゃ変だな」と（^^ゞ

11・不審な男達

「うわ……ひどい顔してるぞ？　大丈夫か？」

翌朝、リクは目覚めると第一声にそう言われた。

シスは目を丸くして、深くくまのあるリクの顔を見つめる。

「るっせえ……ひどい顔とか言っな」

リクはむくれて言い返す。

リディに元気づけて貰ってからは寝れたのだが、そもそもその時間が夜遅かった。

睡眠時間は、3時間ほどである。3時間で見知らぬ土地での旅の疲れが取れるわけも無い。

リクはため息をついて、階段を下りる。下から、おいしそうな朝食の香りが漂っていた。

「ん……やった！　この匂い、パンだな」

くんくんと嗅ぎ、笑顔になる。この世界に来て最初に安心したことは、なぜか食べ物が元の世界と同じことだった。

ちなみに、リクの好物はジャムも何もつけないパンだ。

「リク、パン好きなの？」

いっしょに階段を降りながら、リディはリクに訊ねる。

「うん、パンは凄いと思う。あれは凄いのよ。ちなみに、うどんも

凄い。俺は小麦粉で出来てるんだ」

「……何それ、おもしろいつ！」

リクの言葉に、リディは思わず吹き出した。

「ちょ、馬鹿にするなよ。ほんとに小麦粉は凄いんだからな」

「分かった分かった。ああー、おもしろい」

リディは笑いながら、階段を駆け降りる。つられて笑いながら、リクも駆け降りた。

下の食堂ではもう朝食が準備出来ていて、いつの間にかシスがもうテーブルに座っていた。

テーブルの上には、リクの予想通りの、ほかほかに焼けたロールパン。

そして、目玉焼きとコンスープ、サラダにフルーツにミルクという定番セットだった。

「いただきます」

リクはそう言うが早いが、パンに手を伸ばす。

シスがコンスープを一口飲んでから口を開いた。

「朝食を食べたら、早めに出発しよう。エルフの森は遠いから」

「……エルフの森に行くのかい？」

おばさんがシスの言葉を聞いて、包丁と共にぱつと振り向いた。

「え、あ、はい。エルフに会ったら、何か分かるかと思って…」

…」

リクは急に自分の方を向いた包丁にびくびくしながら答える。
へえ……と、おばさんは難しい顔をした。

「エルフねえ……。まあ、せいぜい気をつけな。エルフは、ゲーム遊戯の参加者を嫌ってるから」

「はい……。ありがとうございます」

少し不安を抱きながら、リクはおばさんに礼を言った。

もちろん、エルフがゲーム遊戯を嫌っていることは知っていた。が、それは特に魔術師に対してで、勇者である自分は大丈夫かと思っていたのだ。

だが、やはりこう言われると不安になってしまふ。

「……大丈夫だよ」

リクの不安を感じ取ったのか、リディが微笑んで言う。

「エルフは優しい種族だって聞いたことあるし、リクは良い人だもん。きっと、大丈夫」

「うん……。ありがとう」

リクはリディに笑い返して、再び朝食を食べ始めた。

朝のナサの街は、活気に溢れていた。
衣装屋や、食べ物屋、甘い香りの漂う菓子屋など、興味をひく店がたくさん並んでいる。

「うわあ、ねえ、あれおいしそうだね！」

「可愛いッ！！あの服、花の刺繍が可愛いッ！！」

「あれなんだろう？見たことない食べ物売ってる！！」

もつとも、一番興味を持っていたのはリディだった。

シスは苦笑して、きらきらと瞳を輝かせて店を見るリディを見ている。

「やっぱり、大きい街は違うな……あ、リディ！！」

たたたと駆けだしたリディを、シスは慌てて呼び止める。

きょとんとしたリディの頭に、ぐいっとマントのフードをかぶせる。

「フード。ちゃんとかぶってなきゃだめだろ。特に、この街は大きいんだから」

「はあい。……ごめん、お兄ちゃん」

リディはしゅんとして、片手でフードを抑える。

そして、シスの隣を歩き始めた。

「……なあ、リディ、なんかあんの？」

リクはこそつとシスに訊ねる。

「いっしょに旅してれば嫌でも分かるって。……一つだけ言っ

く。油断、すんなよ」

曇った表情のシスの言葉にリクは首を傾げた。が、

「……分かった」

とりあえずそう言って、また歩き始める。
少し前ではリディが、飴屋をきらきらした瞳で見つめていた。

「……おい、あいつ」

リク達三人の後ろ……果物屋の陰に隠れて、十数人の男達がいた。
一人の男が、ひゅうつと口笛を吹く。

「“金の瞳”じゃねえか」

男の言葉に、もう一人の男も頷いた。

「ありゃあ、価値あるぜ。逃すな」

「誰が逃すかよ。……おい、見失う前にさっさと行くぞ」

そう言って、男達はにやにやと笑いながら、リク達の後を追いつめた。

11・不審な男達（後書き）

……今更ながら、ナサで何もしてないですね……。
……いや、うん、雪出てきたし！！

12・森の中で

「もうナサが遠いなあ……。もっと、いろいろ見たかったなあ」

リディが名残惜しそうに街を見る。

「俺達は観光のために旅をしてるんじゃないんだから」

シスが苦笑交じりに諭す。

リクは話に入らず、きよろきよろと街行く人々を見ていた。

「……リク？ どうしたの？」

リディが不思議そうに訊ねた。

10秒ほどして、えッ？ とリクは反応した。

「だから、きよろきよろしてどうしたの？」

ぼうつとしてるんだから、と笑いながら、リディは繰り返した。

「ああ。……うん、ちょっとね。いないかな、と思ってさ」

まだ不思議そうな顔をするリディに、

「冬原が」

と、小声で言った。

ああ、とリディは顔を曇らせる。

「フユハラさんって……魔術師だよね？」

「ああ。……俺、まだどうすりゃいいのかわかんないけどさ、でも、昨日はこの街の図書館にいたし、逢えたら……って思ってた。

逢って何かあるって期待は出来ないけど……でも、やっぱ、逢いたいし。」

それに、たぶんってだけで、魔術師が冬原だって確定したわけじゃないし」

リクの言葉に、リディはそっか、と短く答えた。

シスも何も言わないので、しばらくの沈黙が続く。

「……ね、ねえ、リクは、元の世界に帰りたい？」

沈黙に耐えられなくなったのか、リディがリクの顔を覗き込んで訊ねた。

「え？ ああ、もちろん。……俺が戻んなきゃ困る奴がいるし」

ぼそつと付け足された言葉に、リディはええっ！？ と大きく反応した。

「困る奴？ それって、もしかして……恋人？」

「ばッ……でかい声で言っなよ！」

リクは真っ赤になって、慌ててリディの口を塞ぐ。が、シスも興味を持ったようで、リクをじーっと見ていた。

「……リク、僕も聞きたいな」

「し、シスまでッ！！ だ……ッ、もう、リディ！」

「もとはと言えば、リクが漏らしたんでしょ。“俺が戻らなきゃ困る奴がいる”って」

そうだけど、とリクはぼそぼそ言う。

「で、誰？　どんな人？　まさか、リクに恋人がいるなんて思わなかったなあ」

リディはふふつと笑って言う。
隣で、シスがうんうん頷いた。

「ま、兄としては心配要素が減って嬉しいけど」

付け足された言葉に、どいう意味だよ、とリクは食ってかかる。

「リクがリディのこと好きになんないか心配だったんだよ。でも、恋人がいるんなら良かった」

「……お前、シスコンだな」

「しすこん？　何それ？」

きょとんとしているシスにため息をついて、リクはすたすた歩き出す。

「ちょ、リク、待てよ！」

シスが慌てて走り、リクに追いつく。

リディは苦笑交じりに、お兄ちゃんたら過保護なんだから……と呟いた。

ナサの街を出ると、さっきまでの活気はどこへ行ったのか、リク達の目の前には人のいない草原が広がっていた。

「……なんか、さびしいな」

リクの言葉に、リディも頷く。

「エルフの森へ行く人はほとんどいないからな……」。

大体、ナサから出る人は王国の中心にある王都とか、南の小さい街や村に向かうから」

シスが地図を見ながら言う。

確かに、王都へ行く門や南門から出る者はたくさんいたが、エルフの森への西門からは、出る者が少なかった。

「じゃあ、この先はなかなか人に会えないのか……」

そうリクは呟く。前には、深い森。そして、後ろには賑やかな街。

「……いかにも、“何か出ます”って感じだな……」

シスは深い森を見て、苦笑交じりに言う。

リクは、思わず腰に下げた剣に手を当てた。

森の中は、薄暗かった。

高い木々が日の光遮っているのだ。なのに、豊かな森だった。おいしそうなきのこ、見るからに毒きのこなきのこ、強烈な匂いの花……。

「……まるで、RPGのダンジョンだな」

リクは赤に白い斑点のきのこをふんずけて苦笑した。

「……おい、リク」

「ん？」

人食花らしきものを見つめているリクに、シスは小声で話しかけた。

「気付いているか？」

「え？」

きょとんとするリクに、シスは大きくため息をつく。そして、顔をよせて耳打ちした。

「ナサから、誰かに付けられてる。……それも、十数人」

「えッ!？」

目を丸くするリクに、シスは頷く。

「本当だ。まあ、本当につけてるのかたまたま同じ方向なのかは分からないけど……用心しとけ」

「あ、ああ」

シスの言葉に頷いて、リクは腰の剣へ手を伸ばした。
でも……付けているのは、人間だ。いざとなったら、自分は人間に剣で斬りかかるのか？

そう考えたら、鳥肌が立った。

「……あ、見てみて!!」

何も知らないリディが、少し先で言った。

「ここ、開けてる!! 日の光が指してるし、ここでお昼にしない?」

そう言っで、にっこり笑う。

シスは、しょうがないなあ、と笑う。

「じゃあ、昼飯食うか」

シスはそう言いながらも、リクに“油断するな”と目で伝える。
リクは、黙って頷いた。

リディは、笑顔を浮かべたまま石に座る。その時。

「おい」

森の中から、十数人の男たちが姿を現した。
シスが、ちっと小さく舌打ちした。

「お前、嬢ちゃん。お前が欲しいんだ」

男は、リディに言う。リディは目を丸くして男を見つめ、固まっ

ていた。

「“金の瞳”の持ち主は、高く売れる。嬢ちゃんみてえな可愛い外見だとさらにな」

そう一人の男は言っで、にやあつと悪そうな笑みを浮かべた。

「……リディを、売らせると思うか？」

シスが、その言葉と共に剣を抜いた。

刃は、日の光を反射してきらりと輝く。

「おや、兄ちゃん、やるのか？ 言つとくが、お前たちは三人、こっちは18人。」

それに、こっちはみんな武器を使えるのに、お前らは兄ちゃんとその“勇者”、二人だけだろう？

どう考えたって、勝敗は決まっているだろう？」

「……それはどうか」

リクは男にそう言いながら、剣を抜いた。

思ったよりも軽い。剣の使い方、シスと木刀で勝負をしたから、少しは分かる。

問題は、自分に人間が斬れるかどうかだ。

「……“勇者”か。お前らは強いんだろうけどな、たかがガキが、大の男に勝てると思うなよ」

男はそう言つと、剣を抜く。

その男がリーダーなのか、他の男達も一気に剣を抜いた。

12・森の中で（後書き）

……リディとリクの恋愛フラグ、消えました。
いえ、まだ厳密には消えたわけじゃないです（どっちだ）。

まあ、二人の恋愛はそのうち……。

13・戦闘と決意

「リク、リディはお前に任せる」

シスが、男達を睨んだまま囁く。リクは頷いた。

男達が、一斉に斬りかかってくる。それを、シスは軽やかに撃退していった。

目の前で、繰り広げられる戦闘。日の光を反射して煌々たくさん
の剣と、地面に赤く後をつけていく血……そんな光景を、リクは息
を飲んで見つめていた。

どう反応すれば良いのか、分からない。現実なのに、現実味がな
い。

「……」

「……リク、大丈夫？」

ただ戦闘を見つめているだけのリクを、リディは心配そうに見つ
めた。

「え？ あ、うん、大丈夫！ そりゃ、まあ、はじめて見たけど
さ」

リクは無理矢理笑みを浮かべて答える。

「……そう、だよな。リクの世界は、もしかしたらこんなの、な
かったかもしれないんだよね」

リクは目を伏せ、呟いた。

「まあ……うん。でも、俺、この世界に来たんだし、ちゃんと、リディを守るから……！」

ぐつと拳を握って、リクは言う。

リディは一瞬リクを見つめて、にこつと頷いた。

「うん……ありがとう。でも、無理しないでね？ 違う世界に慣れるのは大変だと思うし、ほら、お兄ちゃんだって強いから！」

「ああ……確かに、シス強いな。なんかもう……無敵状態」

リクは頷いて、戦闘中のシスを見る。

シスは擦り傷一つ負っていなかった。まわりには、もう数人の男が倒れている。

「お兄ちゃんは、私のためにあそこまで強くなってくれたんだ」

リディは、シスを誇らしげな目で見つめる。

「そっか……。リディも、大変なんだよな……」

リクは、少し目を伏せ呟く。

さっきの男達の言動で、リディを取り巻いている状況は分かった。“金の瞳”の持ち主であるリディは、いままでも何度もあんなことがあったのだろう。

シスの言葉の意味が、やっと分かった。

「でも、私より、お兄ちゃんなの。お兄ちゃんは、私がこの瞳に生まれなければ、普通の人として暮らして……。剣で、人を傷つけるようなことは、しなくてよかったはずなのに……。私のせいで

……」

自分を責めるような目をするリディの頭を、リクはぼん、と叩く。

「んな事言うなって。シスだって、リディを守りたくて守ってるんだから。」

リディが気に病むことないよ、な？」

リディはリクを見上げて、

「……うん、ありがとう」

と無理な笑顔で頷いた。その時

「やああつー!!」

一人の男が、リディに手を伸ばす。片手には、剣。

「しまった、リディ……ッ!!」

シスが、リディを見て叫ぶ。

リクは慌てて、男とリディの間に入った。

「……一度も、人を斬ったことがない顔してるぞ。大丈夫かあ？勇者」

男が、にやつと笑ってリクに言う。

そして、なんの躊躇いも無く、剣を振り下ろした。

「……くっ!!」

リクはなんとか、それを受け止めた。
そして、勢いよく跳ね返す。

「はあっ、はあっ」

リクは、大きく方を上下させる。

「跳ね返して……どうすんだ。

お前は、俺を斬れない。でも、俺はお前を斬れる。どう考えたって、俺の勝ちだろう？」

「……ッ」

リクは、ただ男を睨む。

そして、一気に間合いを詰めた。勢いよく、剣を男に振りおろす。

「ッ！」

男は、それを剣で受け止めた。
きいいいん……という金属音が響く。

「おい、勇者よお、俺のことを斬れねえんなら、俺に勝てないだろ？」

もちろん、魔術師にも。だったらよ。“金の瞳”をさっさと寄せ。そしたら、お前のことは見逃してやるからよお！」

言い終わるとともに、男は剣を突き出した。

リクは、くるっと身を返してそれを避ける。そして、顔を伏せて、

「……決意、したんだ」

そう呟いた。男は眉をひそめる。

「ああ？」

何を決意したんだ？ そう言いかけた男をリクは 斬った。
男の腹から、血が噴き出す。

「……っあ、な……ッ」

男は目を見開いて、ゆっくり倒れて行く。
リクは、荒い息をしたままそれを見つめていた。

「リク……ッ」

リディは、両手を握りしめてリクを見つめる。
リクが、人を斬った……それに、驚いていた。

「……私のせいで……ごめん」

擦れた声で呟くのと同時に、ぼろっと涙がこぼれた。
リディが涙をこぼしたことを知らないリクは、どさっと重い音を
させて倒れた男を見つめていた。

「……ッ！」

倒れた男の側に膝をつき、唇を噛み締めてリクは頂垂れる。
男から流れ出している血が、スポンを赤く濡らしていた。

「……リク……」

残りの男達を全員倒したシスが、小さな声で言った。
リクは、立ち上がって振り返る。

「シス……俺……」

リディを見つめて、言う。

「覚悟を、決めた。もう迷わない」

13・戦闘と決意（後書き）

やっと、決意してくれた……（ - - …… ）

うじうじしすぎだリクめ!!（笑）

14・馬車のおじさん（前書き）

駄文中の駄文です。御勘弁ください。

14・馬車のおじさん

シスは、相手を殺さないように上手く倒していた。
ただ、丸一日は目覚めないらしい。

リクの斬った男は傷が深く、数分で息絶えた。
気絶している男たちは放っておくにしても、リクはこの男をそのままにしておくことは出来なかった。

といつても人を埋めることの出来るような穴は掘れないので、草で覆って花を手向ける。

「……よし、行こうか」

しばらく両手を合わせた後、シスが言った。

「……なあ、こんなことって、よくあるのか？」

「……ああ」

リクの問いに、シスは一瞬沈黙して頷いた。

リディは、目を伏せている。

「リディの瞳は、珍しい。これは、リクももう知ってるだろ？
珍しいものを持つ者は、見世物にされたり、売られたりする。リ
ディのような“金の瞳”を持つ女の子は、貴族に売られたりとか。
これまでも、何度も狙われた。これから……きつと」

シスの言葉に、そっか……とリクは目を伏せる。

「ごめんね……」

リディが、俯きながら呟いた。

「リディは謝ることなんかない」

シスはぼん、とリディの頭を軽く叩いて言う。

リディは、黙って俯いた。

「でも……お兄ちゃんだって、私のせいで、いつもトラブルに巻き込まれて……やっぱり、私は……ッ」

堪え切れなくなったのか、リディの瞳からぼろつと涙がこぼれた。リディは、慌ててそれを拭う。シスは、優しく頭を撫でた。

「いままで何度も、それは聞いた。そのたびに、僕は言っただろう？ 『リディのせいじゃない』 って。いいか、リディ。僕とリクの前から姿を消したら、許さないからな？」

「でも……お兄ちゃ……。リクだって……私がいなかったら、人を殺さずに……ッ」

ひっく、としゃっくり上げながら言うリディを、リクはぽんとはたいた。

「そんなに、自分のせいにするなよ。そりゃ、俺だって初めてだったけど、俺は決意したんだから！」

それに、リディがいなきゃ、俺は“神の神殿”にたどり着けないだろう？」

リクの言葉に、リディはしばらく黙りこんで、そうだね、と頷いた。

「そういえば、私はリクの役に立てるんだったね」

そう言って、へへっと笑う。

リクは、そんなリディの頭をぽこんとはたいた。

「当たり前だろ」

リクは、そのままリディの髪の毛をくしゃくしゃと撫でる。

「あははっ、やめてよ」

リディはリクの手を振り払うと、すうーっと息を吸い込んだ。

「ありがとう。リクとお兄ちゃんのおかげで、なんか、気持ち良くなった。」

早く、この森を抜けよう？ エルフの森までは遠いんでしょう？」

そう言つと、すたすたと先を歩いて行く。

「良かったあ」

リクはリディの後姿を見て、笑う。

「“自分が必要とされている”って分かった時、人は嬉しくなるからね。ありがとう、リク」

シスはリクに微笑んで、リディの後を追う。

「あ、ちょ、待てよ！」

リクも、慌てて走り出した。

暗い森を抜けると、視界は一気に開けた。

「んんーっ、やっぱりおひさまの光は良いね！」

リディはそう言って、空を仰ぐ。

天気は、これ以上ないほど良かった。

「不思議なきのこが生えてないのが、こんなに良いことだなんてな」

シスも、綺麗な草花を見て感動している。

「……あ、見て見て、馬車！！」

リディが、すぐ近くを走っている馬車を見て声を上げた。馬車と
いつても、後ろには干し草がたくさん乗っている。農民だろうか、
運転しているのは中年のおじさんだ。

「馬車がどうかしたのか？」

シスがきょとんとしてリディに訊ねる。

「乗せてもらえないかな？」

リディがきらきらした瞳でシスに言う。

「あの馬車に？」

リクの問いに、うんつと頷くリディ。

「あの方向、エルフの森と同じでしょ？　もしかしたら、途中まで乗せてもらえないかなーって」

「ああ……頼んでみるか」

シスはリディの言葉に頷くと、おじさんの馬車が通るのを待つ。そして、何かおじさんと話していた。

しばらくして、身振りでリクとリディを呼ぶ。

「良いってさ。エルフの森はさすがに行かないけど、近くの町までいくからって。馬車に乗れば、大分早くなるぞ」

「やったあ、ありがとうございます、おじさん！」

リディが満面の笑みで礼を言う。

リクも、ありがとうございます、と頭を下げた。

「いいんだいいんだ、それよか、坊主、お前勇者かあ。わけえの
てえへん
に大変だなあ」

なまりで話すおじさんは、リクのこともしリディのことも、少しも嫌がっていなかった。

それに、リクは少しきよんとする。するとおじさんはリクの表情を見て、苦笑した。

「おう、すまねえすまねえ。おらあエルフの森の近くの、ユドフ町に住んでてよ。シャイア王国じゃ田舎だから、標準語とはちつと違え^{ちげ}よなあ。ただこれしか喋れんくてな。勘弁してくれや」

どうやら、リクが言葉をよく分らないと思ったらしい。

「あ、いや、そうじゃなくて。俺のこと、嫌じゃないのかなって」

今度は、リクの言葉におじさんがきよんとした。そして、豪快に笑う。

「おらあそんな気にしねえよ。お前^{めえ}さんはお前^{めえ}さんだろが。それに、お前^{めえ}さん、悪い奴には見えんしなあ。

ともかく、ユドフ町まで送ってやるから、早^{はや}う後ろ乗れ」

おじさんはそう言いながら、後ろの干し草を上を指差す。

「ありがとうございます！」

リク達はお礼を言って、いそいそと後ろに乗り込んだ。

14・馬車のおじさん（後書き）

ちなみに「ユドフ町」の名前の由来は「湯豆腐」です（おい）。

ちなみに、今日からテスト一週間前なので、更新が難しくなるかもしれません。

そして、評価などとして頂くと作者は喜びの舞をします。

15・エルフの森へ

馬車に揺られながら、リク達はのどかな景色を楽しむ。
もう、6時間は乗っただろうか。すっかり夕暮れだ。

「若^{わけ}えの^{てえへん}に大変だよなあ。おらあ、お前^{めえ}さん応援してっからよ、頑張れよお」

と、何度目かの同じ言葉を口にするおじさん。
最初は笑顔で『ありがとうございます』と言っていたリクも、今はもう苦笑だ。

「村さ着いたら旨^{うめ}えもんいつぺえ食わせてやっからよ、もうちよつと待ってなあ。村までは、あと少しだべ」

「あ、はい、ありがとうございます」

礼を言った所で、リクはシスに腕を引っ張られた。

「わわ、なんだよシス」

バランスを崩し大きくゆらめいて、リクは慌ててシスに掴まる。

「怪しいと思わないか？」

シスは、リクの耳にそう囁く。

「はあ？」

「だから、こんなに良くしてくれるなんて怪しくないか？」

「んー……まあ、怪しいかも……。おじさんの町、被害が大きかったって言ってたし」

シスの言葉に、リクは頷く。

「だよな。だから、油断するなよ？　町についたらすぐにエルフの森へ行くけど、油断大敵、だからな」

「ん、了解」

そう返事して、リクは景色に視線を戻した。

遙か遠くに、小さな町らしきものが見えてきていた。

「おーい、勇者さん、着いたぞお。ほら、降りるべ降りるべ」

おじさんの言葉に、リク達はとんと馬車から下りた。
ナサとは比べ物にならないほど小さな町だ。……いや、村、と言った方が正しいか。

「ここが、ユドフ町だ。旅の人あ珍しいから、みな歓迎してくれっよ。おらあ村長んとこさ行ってくつから、ちよつと待っててな」

おじさんはそう言うと、近くの民家へ入って行った。
することも無く、リクはきよるきよると辺りを見回す。1キロほど先に、森があった。

「あれが、エルフの森？」

リクの問いに、シスは頷く。

「ああ。あの森の奥深くに、エルフの一族が住んでる」

シスの言葉に、リディが瞳を輝かせた。

「あの森にエルフがいるのっ!? 早く行こうよ」
「明日な。今日はもう暗いから」

シスはそう言って、リディの頭を撫でる。

リディはすっかり沈んだ日を見て頷く。その時、ばたばたという足音が近づいてきた。

「おい、村長を連れてきたど! みんな歓迎する言つとる!」

おじさんが勢いよく手を振りながら、リク達の方へ駆けてくる。その後ろには、顎鬚を生やした50代くらいの男性。そして、村人だろつか、数十人の男女や子供だ。

「おじさん、ありがとう! 後ろの人達はなんで……?」

リクは眉をひそめて村人達を見る。

村人達は、なぜかにこにこしながらリク達を見ていた。

「いつやあ、とうとう来たなあ、勇者がよオ」

「助かった、神様はきつと、強え奴を選ん^{つえ}でくれたろう」

「勇者、白の魔術師なんかさつさと殺しちまえ!」

そんな事を口々に叫ぶ村人達。

リクとシスは、思わず目を合わせた。

「これ……何？」

思わず呟いたリクに、馬車のおじさんが答える。

「みんなあ、勇者の到着を待ってたんだ。俺らの敵である白の魔術師を、勇者は絶対倒してくれるんさ思ってな。そうだろ？ 勇者さん」

「ああ……そういう……」

少し後ずさりするリクに構わず、村人達は魔術師を殺せと言い続ける。

「あの……俺は、あの、戦うことになっても、別に、殺すつもりは……」

おろおろとそう言うリク。村人達は、一気に形相を変えた。

「そりやなんだ？ 俺らは、前の魔術師とエルフの所為で酷え目にあっただぞ！」

お前、魔術師と同じ世界から来たんなら、ちゃんと落とし前つけろやア！」

30代くらいの屈強な男がそう叫ぶ。

おじさんがリク達を快く迎えたのは、こういう理由だったのかと、シスは心の中で苦笑した。

「あの、俺らはエルフの森へ行きたいだけで！ 魔術師と戦う気なんかないんです！」

リクは必死にそう叫ぶ。だが、村人達の形相は変わらない。
そして、一人の少女がこう叫んだ。

「エルフの森へなら、魔術師も行ったわ！ この町を抜けて！
今頃、エルフ達の矢の餌食になっているんじゃないかしら！」

嘲笑を含んだその叫びに、他の村人もそうだと同意する。

「冬原も……？」

リクはそう呟いて、森へ目を向ける。暗い上に深い森に、雪の姿
など見えるはずも無い。

でも、リクは目を細めて森を見つめた。

「シス、リディ、行こう！ 早く行ったら、冬原と会えるかもしれ
ない。夜だからって、待ってられない」

リクの言葉に、シスとリディは頷いた。

「フユハラ？ 誰だそいつは。魔術師か？ そうか、行ってくれ
るんだな？」

村人はそう言うのと、何を勘違いしたのか馬を二頭貸してくれた。
“雪を倒しに行く”と勘違いしたのは明らかだが、馬を貸してく
れたのだから、わざわざ誤解を解く必要も無い。

「おじさん達、ありがとう！ じゃあ俺ら、エルフの森へ行つて
くる！」

村人達に手を振って、リク達はエルフの森へと馬を進めた。

15・エルフの森へ（後書き）

やっと…更新出来ました。

長らくお待たせして、申し訳ありませんでしたっ！！

しかもその上、話が全然進んでいないという……。

次は、とうとうエルフの森到着で、おそらくエルフに会います。

次回は、もう少し早く……更新……出来る、筈……。

16・森の中で

シスに馬の乗り方を教えてもらいながら、リクは森へ進む。
先を進む馬に、リディとシス。そしてその後ろを追いかけるのが
リクだ。

「暗い森……」

リディが、森に入った途端そう呟いた。
高い木々が月明かりを遮っていて、数十メートル先は見えない。

「エルフの所は、明るい和良好的な」

シスが笑ってそう言うが、その声は森に虚しく響く。
夜だから暗いからか、三人の口数は少ない。

「なんか、出そうだな……」

リクはそう呟いて、木々を見る。

「出そうって？」

「ほら……幽霊とか」

リクの言葉に、リディはぶるつと身体を震わせた。

「ちょっと、リク、やめてよ！ 私、そーいうの嫌いなんだから
！」

「ははっ、出そう（、）ってただけだって」

暗い森に、リクの笑い声が響く。

ぶるぶると震えているリディの感触に、シスもくすつと笑みをこぼした。

その時、木々は一斉にざわめいた。

「っ、何？」

リディが不安そうに、辺りを見回す。

リクとシスは、さっと剣に手を伸ばした。

「なんだろう……なんか……来る？」

シスは、注意深く辺りを見回しながらそう呟いた。

その時、びゅん！ と風を斬る音がした。

「え……？」

地面に、勢いよく刺さる矢。蒼い矢羽が、微かに揺れている。

リクは、じばらくじつとその矢を見つめる。そして、

「……矢？」

少し震える声で、呟いた。シスは剣を抜くと、リディを矢の飛んできた方から庇う。

「誰だよ！ 姿を見せろ！」

乾いた声で、リクはそう叫ぶ。その時、

「言われずとも」

低い声がした。声のしたのは、リク達の周りから。大勢いるらしい。

「そなたが勇者であるのなら、すぐには殺さない」

その言葉と共に、森の奥から大勢の人が出てきた。リク達に、矢をつがえた弓を向けながら。

皆、白く輝く馬に乗っている。その上に乗っているのは、全てが美系の男だった。

白い肌に、男にしては長めの金髪。そして、皆矢筒を背にかけている。

人とほとんど同じ外見だ。違う点と言えば、耳が尖っているくらいか。

暗闇でも、そこだけがなぜか明るく見えた。

「……あなた達は……エルフ？」

シスが、じろじろとその人達を見ながら訊ねる。警戒心を解いていないのが、リクにも分かった。

「ああ。私達はエルフ族だ。そなたらは、勇者の一行だろう。この地に来たのは、情報を求めてか。それとも、“白の魔術師”を追ってか」

リーダー各らしい、一番先頭にいるエルフがそう訊ねた。

「……両方、です。あなた達は、賢くて、ずっと古い種族で、いろんなことを知っていると聞きました。だから、知っていることがあれば教えてもらいたい。」

それと、冬原……魔術師についても。ここに、来たんでしょう？
俺は、出来れば冬は……魔術師に逢いたいんです」

リクは、エルフの目を見てそう言う。

エルフも、じっとリクを見つめた。

「……魔術師について、話すことは出来ない。我らの姫は、魔術師と共にあることを望んだから」

「……どういうことですか？」

エルフの意味の分からない言葉に、リクは首を傾げる。

エルフ達は一斉に、構えていた弓を下ろした。

「だが、情報ならば、教えよう。知りたければ、ついて来なさい」

16・森の中で（後書き）

「え、男のエルフ……？」と思った方、いらっしゃるでしょうか。
いえいえ、金髪の綺麗なエルフのお姉さん（？）も出てくるので、
“必ず”――！！

そして、お気に入り30件突破！！　ありがとうございます！

17・純白の城

エルフ達の後を追って、一時間ほど歩いただろうか。

森の中心らしき、拓けた場所に出た。そこには、魚も水鳥もいない大きな湖。そして、白……どこまでも純白の建物。

神秘的な霧因気を漂わせる、大きな城があった。人影は、無い。

「ここは……」

「我々エルフの一族の城だ。中へ来なさい」

リーダー格のエルフが、リクの呟きに答える。

「あの……ッ！」

城の門を潜りながら、リクは尋ねた。

「あなたの、名前は？」

「私の名前？」

「はい。あの、呼びようが無いし」

リクの言葉に、エルフは表情を変えずに、

「名は、よく知らぬ者にそう簡単に明かすものではない。好きに呼べ」

と答える。

「……この世界では、そんなものなの？」

リクはシスにそう囁いた。が、シスも首を傾げる。

「さあ……エルフは古くからの種族だから、いろいろとあるんじゃないか」

シスの言葉に、そんなものかとリクは頷いた。

リディはというと、美しい城の内面に魅入っている。白い壁に、金の装飾。そして、長い金髪人々の美しいエルフ達。

皆、白が薄い黄色、薄い青のドレスのような服を纏っている。

「みんな、綺麗な人に、かつこいい人……」

リディがきよろきよろとしながら呟く。エルフはそんなリディに構わず、どんどん先に進む。

長い廊下をしばらく歩いた頃、

「……この部屋へ」

エルフは、ある一室を指差した。

リク達はそろそろとそこに入る。中のソファに座るように促され、座った。

ソファはやはり、そこまで白いかといわれるほどの、白。

「“紅の勇者”に逢うのは、200年ぶりだ。果たしてそなたは、“神殿”へたどり着けるか？」

エルフは、そう言ってリクを見つめる。

交わる、紅い瞳と青い瞳。リクは、頷いた。

「辿り着きます……必ず」

数日前とは違う、決意した口調。エルフは、頷く。

「であれば、そなたに情報を与えよう。

我らエルフも、“神殿”の場所は知らない。だが……大まかな場所なら、特定出来る」

その言葉に、リクはごくりと唾を飲み込んだ。

シスも、微かに身を乗り出す。

「それは　　北の大陸だ。大皇国シュテルゼの支配する大陸。

そこに、おそらく“神殿”はあるだろう」

「北の大陸……シュテルゼ皇国……そこに……？」

リクは、エルフの言葉を繰り返す。

北の大陸、ということは、海を渡らねばならない。

「それは、なぜわかったんですか……？」

シスが、そう尋ねる。

「分かった？　予想がついた、というほうが正しいだろう。

記録ではいつも、“紅の勇者”か“白の魔術師”双方が、北に向かっている。そして、激しい戦闘の音を聞いたという者もいる。いままでの遊戯^{ゲーム}全てでだ。

だから、我々はおそらく、“神殿”は北に現れるだろうと思っている」

エルフの説明に、なるほど、とシスは呟いた。

「じゃあ、次の目的地は北の皇国シュテルゼだね」

リディが、瞳を輝かせて言う。いつも、彼女の好奇心は失われな
いようだ。

シスはそんな妹の頭にぽん、と手を載せて、

「まずは、船を探さないとな。」

目的地はシュテルゼ皇国じゃなくて、北と一番近い港町ラメール
だ」

と言った。

「船か……そうだよな。飛行機なんて無さそうだもんな」

リクは考え込みながら、そう呟く。

そして、もう一つ聞くことを思い出した。

「あ、あのっ！」

慌てて、口を開く。

「魔術師は、まだここにいますか!？」

リクのその問いに、エルフは眉を寄せた。

「ここで、“白の魔術師”との戦闘は許さない。もし戦闘をした
のなら、我らはそなた達に弓を引く」

敵意の籠った声を聴いて、リクは激しく首を横に振った。

「いえ、戦闘なんてするつもりはありません！　ただ、俺は魔術師に会いたくて……！」

魔術師は、たぶん俺の友達なんです。お願いします、逢わせてくれませんか？」

リクの言葉を聞いて、エルフはため息をついた。

「会って、どうなるのだ。仮に“白の魔術師”がそなたの友人であつたとしても、^{いま}現在は敵同士。

ここで、戦いをさせるわけにはいかない。我々の歴史を知らぬわけではあるまい」

エルフにそう言われ、リクは一瞬目を伏せる。でも、すぐに口を開いた。

「会って、どうなるのか。それは、分かりません。でも……お願いします。いま、ここにいますかだけでも！」

そしたら、俺は外で魔術師が出てくるのを待ちます」

リクに見つめられ、エルフは再びため息をつく。そして、言った。

「……“白の魔術師”は、もうここにはいない。つい先ほど、北へと旅立った」

17・純白の城（後書き）

エルフ、とうとう出てきました。

リクのお話ではもうエルフは出てきませんが、のちのち淒く……そりゃあもつ出る予定です。

18・海に向こうの皇国へ

「いない……ッ？ いつ、旅立ったんですか？」

エルフの答えに落胆しながら、リクは尋ねる。

「数刻程前だ。しかし我が城一の駿馬に乗っていったから、もうそなた達では追いつくことは不可能だろう。

“白の魔術師”に負けぬ為にもそなた達も早く旅立つと良い。我らは本来、“紅の勇者”にも“白の魔術師”にもつかない、平等な立場。そなた達にも駿馬を二頭授けよう」

もつとも、姫は別だが……エルフはそう呟く。

「あ、ありがとうございます」

落胆を隠し切れずに、リクは頭を下げた。

「早いつー！」

シスと白い馬に乗りながら、リデイが歓声を上げる。

エルフから貰った馬は二頭とも純白な毛並みで、今までの馬とは比べ物にならないほど早かった。

その上、

「すげえ！ シス、これ俺にも上手く乗れる！ この馬乗りやすい！」

騎馬術を知らないリクでも、上手く操作できる。

3人を乗せた二頭の馬は、あっという間に森を抜けた。

「さすがエルフ。馬の質が違うな……。この調子なら、明日の夜には港に付ける！ ラメールは、シャイア王国の中だから」

シスが上下に揺れながら言う。

「とにかく、船を捕まえるのに早いに越したことはない。急ごう！」

明け始めた日を見ながらリク達は、馬を走らせた。

「ほう、ラメールに行くのかい。皇国に行くのかね？」

立ち寄った町で、リクはそう町のおばさんに聞かれた。

「はい。そんなに、ラメールからは皇国行きの船が出てるんですか？」

「いや、違うよ。ただ、お前さんは勇者っぽいからね、皇国に行くと思ったのさ」

「やっぱり、今までの勇者や魔術師はみんな皇国に？」

シスの質問に、おばさんは頷く。

「私の聞いた話だと、ばあちゃんもひいばあちゃんも、勇者や魔術師が皇国に行くのを見たそうだ。」

だから、お前さんたちも皇国に行くと考えるのが筋だろう？」

お婆さんのその言葉に、リク達は顔を見合わせた。

やはり、エルフの情報は正しい。となると、もう一つ聞いておきたいことがあった。

「あの、だったら、やっぱり魔術師もここを通りましたか？」

「魔術師？ ああ、通ったよ。つい数時間前だねえ」

「数時間前！」

リクは、ごくつと息を飲む。

「急いだら、追いつくかな？」

リデイが呟く。が、

「……いや、無理だろう」

シスが、そう呟いた。

だよな、とリクも呟く。しかしシスは、でも、と続ける。

「とにかく、急がないと。魔術師はもう出発してる。皇国に行かなきゃいけないことはわかっていても、具体的な場所までは分からないんだ。早く行って、魔術師より先に“神殿”につかないといけないんだから」

「そうだよな！ よし、急ごう！」

リデイの言葉に、リクは頷いた。

「おばさん、ありがとう！」

「あ、ああ。気をつけなよ」

おばさんに礼を言いながら、リク達は再び馬に跨る。

「あ、そうだ。皇国行きの船は、一日に3回だからね！今日の便に乗りたければ、絶対に馬を休めちゃいけないよ！」

だだつと走り出した後ろから、おばさんのそう叫ぶ声が聞こえた。

皇国との貿易により栄える港町、ラメール。

日が暮れかける頃、リク達はその門を潜った。

「ま、間に合ったか！？」

ぜいぜいと息を切らして、リクは辺りを見回す。

そんなリク達を、町の人々はじろじろと見つめる。

「どうしたんだね、そんなに息を切らして」

一人のおじさんが、眉をひそめてそう尋ねた。

「あ、あの、船は。皇国行の船は、もう出ちゃいましたか！？」

「皇国行？ いや、確かまだあと一回出るな。ただあれは6時発だから、あと5分で……」

「ありがとうございます！」

おじさんの答えを聞くなり、シスは走り出す。

「リク、リディ、早く！ 馬も乗せられるか聞こう！」

「うん！」

さすがに町の中で馬に乗るのは……と躊躇し、リクは馬を引いて走る。

シスも馬を引いているので、リディが先に走って船着き場へ行っていた。もちろん、二人の目の届く距離だ。

「切符、買えたよ！ 馬も乗せてくれるって！」

リディが3枚の切符を振る。

皇国行だという船は、とても大きかった。全長70m程で、高さは10m程だろうか。

暗くてよく見えないが、煙突が二本立っている。船の船体は黒。そこに白字で“オケアヌス号”と書いてある。

「おおー……これで、海を渡るのか……」

リクは目を丸くして、目の前の大きな船を見つめる。船旅は初めてだ。不安と期待とが、胸に溢れる。が、

「リク、早く乗らないと出ちゃうよ」

というリディの声に、はっと我に返った。

慌てて、馬を連れて船に乗り込む。船員はリクとリディを見ても、そこまで驚きはしなかった。

馬を船員に預け甲板に出ると、暗いながらも景色が見える。

「よし、行こう！ シュテルゼ皇国へ！」

遠く見える地平線を見つめ、リクは拳を握りしめた。

18・海に向いつの皇国へ（後書き）

一週間……うん、一週間以内だから、良いよね。と自分に甘い作者です。

ちなみに、「港町ラメール」。ラ・メールはフランス語で「海」です。まんまですね。

そして「オケアヌス」はラテン語で、これも「海・大洋」という意味です。

船の外観は、作者にとってはミニタイタニック。

タイタニック大好きなので（笑）。ジャック、かっこいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9146w/>

神様の遊戯 - 紅の勇者 白の魔術師 -

2011年11月24日19時56分発行